

talk! talk! talk! 女優・麻丘めぐみさん



女優 麻丘めぐみさん

子役デビュー後トップアイドルになり女優へ、現在は舞台のプロデュースなども行い、今なお活躍の幅を広げる女優、麻丘めぐみさん。実は「カメラ屋さんに行く」と1、2時間は動けなくなる」と言うほどのカメラ好き。仕事柄小さな頃からカメラに慣れ親しんでおり、5年前から本格的に撮りはじめたという。舞台プロデュースにかかる思いの高まりとともにカメラへの思いも強くなっていった麻丘さん。写真を撮る楽しさ、面白さと合わせ舞台作りの魅力についてもお話いただいた。

プロフィール

あさおか・めぐみ。1955年、大分県生まれ。大阪育ち。1959年、梅田コマ劇場にて初舞台を踏み、以来、子役・モデルとして活躍する。1972年「芽ばえ」で歌手デビュー。同年、レコード大賞最優秀新人賞を受賞。1973年「私の彼は左きき」で日本歌謡大賞放送音楽賞、レコード大賞大衆賞を受賞。一躍トップアイドルとしての地位を確立し、その年のNHK紅白歌合戦初出場を果たす。以降、女優として数多くのドラマ・舞台に出演している。数年前からJAZZを勉強している。最近では小劇場のプロデュースや自ら演出したりと舞台制作に意欲的に参加し、2002年から「Theater Dreams Company (シアタードリームズ・カンパニー)」を立ち上げ活動を続けている。

演劇プロデュースをきっかけに 本格的に始めたカメラ

写真を撮り始めたのはいつ頃からですか？

最初に写真に興味を持ったのは、私が歌を唄っていたころ、義理の兄が私の専属フォトグラファーをやっていたことがきっかけなんです。雑誌などの取材で兄の撮影姿を見ていて、面白いなあと感じたんです。でも、本格的に写真を撮り始めたのはここ数年なんです。5年前、小劇場の演劇をプロデュースすることになって、演劇では必ずチラシを作るんですね。そのチラシに使う写真を自分で撮ったんです。

なぜご自身で撮ろうと思われたのですか？

この演劇をプロデュースする上でチラシをどうしようかと考えたときに、自分の頭の中でこういうものだっていうハッキリしたイメージがあったんです。それをフォトグラファーに伝えて撮ってもらい、自分で撮ってしまった方がそれをちゃんと表現できるのではないかと思ったんです。それに小劇場には予算もないですから(笑)。小劇場の基本は「なんでも自分たちでやる」、今はいいカメラも出ているし、フォトグラファーを使わずこは自分で撮りましょうと。

それまで写真には興味のある程度だったのですか？

それまでも一眼レフカメラを持っていましたから、たまに撮ったりはしていましたよ。もともと人物を撮るのが好きだったんです。仕事先で、たとえばドラマの撮影の合間に働いているスタッフさんの姿を撮ったり。でもそうやって本格的に写真を撮るようになって向き合ったのは5年前が初めてでしたね。それで、素人でも簡単にきれいに撮れるものを買ってその時にニコンUを買ったんです。

撮影はいかがでしたか？

最初の撮影はお天気の良い日に外で撮りましたし、基本的にカメラにおまかせで、露出を計ったり専門的なことはしませんでしたが苦勞なく撮ることができました。ただ、シャッターチャンスをつかむのがとても難しかったです。相手はほとんど撮影経験のない若い役者さんたちでしたからみんな緊張してしまって、もちろん私も緊張していましたが、いい表情がなかなか撮れなくて。役者さんが5人いて、1人ずつの写真と全員集合した写真を何百枚ずつ撮ったりして.....結局全部で1000枚以上は撮ったんじゃないでしょうか。そのフィルムを全部写真屋さんに出して、一枚ずつ見て、それはそれは大変ですよ(笑)。

それで、納得のいく仕上がりにになりましたか？

納得というまではいきませんでしたね。最終的に、この中ではもうこれしかないよねっていうことで選びました。でも、全部自分で衣装を考えてロケハンをして撮りましたから、イメージに近いものは撮れたと思います。

このときの撮影場所がすごく大変な所だったんですよ。横須賀の方にたくさん落書きしてある壁があって、その前に5人並んで撮ったんですが、その壁の目の前は大きな国道なんです。だから、引きで撮るにはカメラマンの私が道の反対側に居ないとはいけません。国道だから交通量もすごいんですよ。トラックなんかバンバン通って。だから、車が途切れた一瞬の合間で撮らなくちゃいけなくて、撮ったらまた車が過ぎるのを待って。

タイミングを取るだけで難しそうですね。

ええ、そのときはとにかく大変でしたね。トラックが目の前をすごいスピードで走っている中で撮っているわけですから、写真を撮るのが楽しいなんて感じる余裕もありませんでしたし、役者さんがいい表情をしたところでシャッターを切らなければという気持ちはずべてでしたね。



TDC初期の作品「Ties」で使われた写真。チラシのイメージに合わせて、ロケハン、衣装なども自らの手で行っている



カメラの前ではその人の素が出る その人の良さを写真に写したい

その後は公演のたびにチラシの写真撮っているんですね。

ええ。自分の出る公演は撮れませんが、それ以外は私が必ず撮るようにしているんです。ほんとにカメラがいいおかげです(笑)。稽古中の写真を撮ったりもして、その写真をパンフレットに載せたりするんですよ。

役者さんたちがとても自然な表情をしていらっしゃいますね。

私の場合は焼くところまでやるとか、写真を撮る楽しさを追求する、技術的に極めていくというのはまた違って、役者さんがいかによく見えるか、いい表情を撮れるかということが大切なんです。

モデルさんと違って、若い役者さんたちは撮影の機会があまりないですから表情をうまく作れないんです。舞台上ではいろいろな表情をしているんですけど、カメラの前に立つとガチガチに固まっちゃって、「いったいどうしちゃったの？」って感じですよ。だからいつもおしゃべりをしながらタイミングを計って撮るんです。最初はカメラに慣れるために、捨てるような気持ちでシャッターを切っています。

それでこんな自然な表情を引き出されているのですから、リラックスさせるのがお上手なんですね。

たぶん普段から、宴会のときは宴会部長みたいなことをしているからじゃないでしょうか。盛り上げ隊長みたいな(笑)。「何でもいつも私なの？誰か盛り上げてよ」って言いながらそういうことをいつもやっているタイプなので、わりと自然に雰囲気づくりはできるのかなと思います。あとはやっぱりシャッターチャンスが難しいですね。撮る側と撮られる側の息が合っていないという写真は撮れないんです。呼吸というか、ここって瞬間があるんですね。それが合わないときはなかなか辛いですね。私自身長く撮られてきていますから、そういう気持ちはよくわかるんです。

撮られる側の気持ちもわかる分、撮る側になったときに活かされることもあるのでしょうか。

そうですね、3歳から撮られていますからね。経験が撮影に活かされていると思います。だから、私からすれば「なんでこんな簡単なことができないの？」なんて思ったりして(笑)、「いやいや、普通は難しいことなんだ」って思い直して撮っていますよ。

面白いのはね、女優さんに「かわいい、かわいい」って言っているとどんどん表情が美しく変わってゆくんです。俳優さんには「かっこいい、かっこいい」って言っても同じ。逆に「その表情ダメ」っていうとガクッと落ち込むし、反応が早いんですね。今の若い人たちが、人から何か言われたりほめられたりすることがあまりないんでしょうね。だから戸惑ったり喜んだり、素直に表情で反応してくれることがとても面白いんです。

最初の頃はと違って、麻丘さんご自身でも写真を撮ることを楽しめるようになったんですね。

ええ、最近では楽しめるようになりました。撮っていて、つくづく人物を撮るのは面白いなと感じます。カメラの前ではみんな素が出るんです。普段緊張したり慌てたりしないだろうなっていう人が、みるみる汗をかいて緊張していたり、かと思うと冗談を言った瞬間にすっと力が抜けていく感じがわかりました。写真を見るときいつもと違うその人の良さが出るのがあって、そういう写真が撮れたときがすごく楽しいし、役者さんが「私じゃないみたい、この写真はサギよね(笑)」って冗談いながら喜んでくれると私もとってもうれしいんですよ。



麻丘さんに撮られた写真が気に入って、プロフィール用に使っている女優さんもいるとか

プロフォトグラファーがアシスタント!? デジタルカメラでの撮影にもチャレンジ

チラシの写真を撮る以前から人物写真を撮られる機会があるとおっしゃっていましたね。

ええ、私は人に興味があって、人が好きなんです。世の中にはいろんな人がいて、できるだけ多くの人を見て、知ってみたいんです。だから自然と人にカメラを向けるようになったんでしょうね。

特にドラマのスタッフを撮っていたっていうのは、男の人の働いている姿っていうのが一番かっこいいと思っているんです。でも仕事しているときのスタッフのみならず、汚い格好しているんですよ(笑)。でも、顔がすごく活き活きしていいんですね。「もっと格好いいときに撮ってくださいよ」って嫌がられましたけど、でもそれではつまらないですよ。格好悪くても活き活きしている、そういうのが私は好きなので、そんな写真が撮れたとき、得した気分になるんです。

一生懸命な姿は魅力的でしょうね。

私もスタッフとして働くときは汚い格好して髪振り乱してやっています。でも本当に一生懸命になるときってそうですよね。飾っている場合じゃない、ありのままの状態それが素敵に見えるというのが本心だと思います。

現在はスタジオで撮られることもあるのですか？

最近はスタジオで撮っていますね。知り合いのフォトグラファーがスタジオを持っていて、使わせてもらっているんです。その方に助手もしてもらっていて、「手前ももっと明るくして」「女優さんのクマ消して、もっと飛ばして！」なんて言っていますよ(笑)。もちろんみんなボランティアですよ。面白いから手伝うよって言ってサポートしてくださるんです。本当に恵まれていると思います。

ずっとフィルムで撮影されていたそうですが、デジタルカメラにはご興味はありますか？

実は去年の秋の公演でそのフォトグラファーに勧められて、初めてデジタルカメラを借りて撮ってみましたよ。ずっとフィルムでしたから、「絶対に嫌だ」って抵抗していたんですけど、「絶対大丈夫、同じだから」って言われてチャレンジしてみたいです。そうしたら、デジタルカメラいいですねー！だってすぐに見られるでしょ？「これは楽でいいわ！」って感じですよ。自分の趣味で撮るのはやはりフィルムがいいという気持ちは変わらないんですが、でもこういう撮影は枚数も気にしないでいいし、デジタルカメラがいいんだって思うようになりました。

現像の必要もないですし、金銭的にも時間的にも短縮できますね。

そうですね。前は心配で何枚も撮っていたのに、今は撮ったものがその場で見られるから5、6枚撮ってオクッってこともありますよ。最近は役者さんが「もういいんですか？」って心配しています。

結局、枚数をたくさん撮ってもキリがないんだって思うようになったんです。自分の中で、この人のピークの顔はこれだ、もう撮るのを止めようって諦めていきました。そうしないと果てしなくずっと撮り続けてしまうんです。演出とすごく似ていて、この役者さんの今の経験とキャリアを見たら、これが精一杯だと思ってそれ以上の演技は求めない。そうやって諦めないで、本当に果てしないですから。自分が撮られているときにそういうことがあったからわかるんですよ。「もういっぱいいっぱいだから、これ以上撮っても何も出来ないから勘弁してー」って。最近では役者さんも撮影を楽しみにしているみたいで、「もっと撮ってくださいよ」って言われたりするんですけどね、デジタルカメラですから、撮ったものを見せて「ほら、きれいに撮れているでしょう」って言って納得してもらっています(笑)。



初めてスタジオで撮影したという1枚。何度撮っても飛んでいるシャボン玉が役者の顔にかかってしまい、かなり苦労したそう



全体をモノクロに加工し、花の部分だけに色を残した。デジタルカメラを使い始めてから画像の加工はずっと楽になったそう

集中力と神経を使う撮影現場「前日は寝られなくなるほど興奮するんです」

写真の一番の面白さはどこだと思われますか？

今、この時を残していけるということだと思います。何か記念のときでも、ふといいなと思った瞬間でもいいですし、写真に撮っておけば思い返して懐かしむことができる。その時代の情景、こんな気持ちだったんだってことが思い出せるのはとても素敵なことです。

以前の写真を見返したりすることも多いのですか？

ありますね。あの時はこうだった、ああだったって、当時の人と話をしたりするときは楽しいですよ。また同じ記憶で笑い合えたり、亡くなった人の写真を見て胸が熱くなったり。

ご自身で撮られた写真を見ても思い出がありますか？

ええ、むしろ撮られた写真より撮った写真の方がしっかり覚えてますね。私はものすごく忘れっぽい性格なんです。毎日覚えることが多いから、毎日忘れていく(笑)。台詞もそう、覚えるのは早いけど、終わるとすぐに忘れちゃう。だけど自分が写真を撮ったことは絶対に忘れないんです。細かいことまで全部覚えているんですよ。撮っているときは毎回、ギリギリのところまでチャレンジしているような感じなんです。いつもいっぱいいっぱいですから。

でも、そうやってチャレンジすることが楽しそうにも見えますね。

ええ、その通り、楽しいんですよ。だって撮影の前日は毎回寝られなくなるんです！私、そういうことってあまりないんです。映画のクランクインだろうが舞台の初日だろうが、前日はガーガー寝られるんですけど、撮影の前日となると目が冴えちゃって。寝なくちゃ、目を休ませなくちゃって思うんだけど、不安なものもあるし、ワクワクしているのもあるしでダメなんです。

興奮してしまっ。

そう、ギラギラですよ(笑)。撮影の日は何もすざい気合いを入れて行くんです。そうしないと途中でへばってしまうんです。だって、撮影中はものすざい集中力でやっていますから、途切れるともうガクっとなってしまいますね。いつも仕事をしているときはまた違う神経を使っていますから、終わったときはもう、ヘトヘトなんです。

そういう意味で、カメラはアマチュアなんだあって思いますね。たとえば撮られる側なら3歳からやっていますから私はプロで、相手が100%を求めてきたら120%の力をいつでも出せるようにという思いでやっています。だから逆に力を使い果たすようなことはしないものなんです。撮る側は始めてまだ5年ですから、毎回全力でぶつかって、毎回もう私には無理だって思いながらやっているんですよ。



2005年6月に行われた舞台「300g」で使われた。チラシ用に、文字を載せるためバックを飛ばして撮影している



毎公演、ワクワクしながら作る舞台「影で支えるスタッフ仕事を楽しんでいます」



そもそも演劇のプロデュースをするようになったきっかけは何だったのでしょうか？

5年前に、後輩の役者さんから一緒にやってくださいと頼まれて、とりあえず1公演だけ手伝ってみようかなってなんとなく始めたんです。ところが公演のプロデュースとなると写真を撮ったり演出するだけでなく、たとえば会場の手配からお弁当の注文まで、ありとあらゆる雑用をしなければいけないんです。公演の前後は寝られないし、まさに死ぬほど大変なんです。やりながらも「なんでこんなことやっているんだらう」って思っていたので、これで終わりにするはずだったんですが、もう一公演だけお願いしますと言われ、無我夢中でもう一公演やり終えたときにはもう、私はこれが好きだって思うようになってしまっ。それで3年前、シアタードリームカンパニーという劇団を正式に立ち上げて本格的に演劇プロデュースをやるうということになったんです。

「私はこれが好き」に変わっていったのはなぜですか？

たぶん、やはり人に興味があるからでしょうね。だから多くの人と一緒に作り上げる現場は好きだし、お芝居の題材もまず、こういう人を作りたい、こんな人を見たいっていう役柄から決めて作ったりするんですよ。

あとは裏方が好きだったことに気づいたんです。 「もしかしてスタッフの方が向いてる？」って。出ている役者さんの魅力を引き出すことができ、それを見たお客さんが喜んでる。それが影で支えているというポジションが好きなんです。裏側で「どうですか、うっふっふ」って言っているのが楽しくて。

麻丘さんはいわゆる表の世界ですと活躍されてきたのに、不思議ですね。

だからこそ面白いのかもしれないですね。でも、影っていても全然影ではないんです。麻丘めぐみだからという部分で許してもらっている所もたくさんあると思うんです。ただ私のできることはきちんとやる、出来ないことははっきりと出来ないと言う、そのあたりをきちんと責任を持って、どんな細かいことでもできるかぎりやりたいと思っています。

たとえば舞台セットを作ったりもされるのですか？

もちろん作りますよ！ ジャージを着てペンキをアチコチにくっつけて(笑)。一昨年の公演ではたくさんのペットボトルを使って3メートルくらいのクリスマスツリーを作ったんですよ。ペットボトルをたくさんあつめて平らに伸ばして、針金でくっつけてペンキを塗って、あのときは本当に大変だった！でも誰もペットボトルでできているなんて気づかないほど綺麗にできたんですよ。大変だといながらも、みなさんの手でひとつの舞台を作り上げるということは、とてもやりがいのあることなんですよ。

そうそう、そうなんです。みんなでひとつのお祭りをするみたいなんです。どこまで行ってもなんとやっても小劇場は小劇場。身分相応と私は言うんですが、お金が無いなら無いなりに、みんなで工夫して力を合わせて作って、それが素敵なことだと思うんです。始めて5年たって、みんなでいいお芝居を作るうという気持ちを持った役者さん、スタッフが集まっていて、今とてもいい環境になってきて、ありがたいと思っています。

毎回公演をやるたびに、これが最後かもしれないって思っやります。本当に先の分からない世界ですし、あまりの大変さにもう辞めようって思っやります。でも、終わった瞬間に次の公演に向っやります。次はどんなのをやるうってワクワクしているんです。これからも、こうして一公演ずつ、全力で続けていけたらと思っています。

次回の公演も、チラシも合わせて楽しみにしています。

はい、ありがとうございます。でも、次回公演は自分が出るので写真は撮れないんですよ！ どういうショットにするかはちゃんと決めてますけど。だから、チラシの写真は撮れない分、稽古中にたくさん撮るうかと思っています(笑)。

[> コンテンツトップへ戻る](#)

※掲載している情報は、コンテンツ公開当時のものです。

株式会社 **ニコン** 映像事業部

株式会社 **ニコン** イメージング ジャパン

© 2019 Nikon Corporation / Nikon Imaging Japan Inc.